

中津城下町遺跡 新魚町地区

中津市文化財調査報告 第55集

2012
中津市教育委員会



SK-11出土陶器壺

序 文

大分県の最北部に位置する中津市は、国指定名勝耶馬渓など緑豊かな自然や城下町の香りを色濃く残す、自然と文化の町として知られています。近年は、自動車関連会社などの進出を受け、工業の町としての新たな側面を見せはじめています。

一方、経済活動の発展・促進は、埋蔵文化財へ影響を与えていることも事実です。市内では、中津日田道路や東九州自動車道建設に伴う多数の埋蔵文化財発掘調査が大分県教育委員会により行われ、当市教育委員会も圃場整備事業、農産物販売所建設に伴う発掘調査を実施しております。また、各種開発事業に伴う試掘・確認調査件数はここ数年減少することなく高止まりしたまま推移しています。今後も東九州道などへのアクセス道路、インター周辺の開発等が予想されるため、埋蔵文化財を取り巻く状況の厳しさは続くものと思われます。しかし、文化財は現代に生きる我々が責任をもって未来へ伝えていかなくてはなりません。

本書はこうした開発の中で、中津市字新魚町における村上記念病院通所リハビリテーション施設増改築工事に先立ち調査した中津城下町遺跡の発掘調査報告書です。調査により近世前半から中頃の土坑などが発見され、当時の町屋敷を考える上で貴重な資料となりました。

本書が学術研究資料としてはもとより、埋蔵文化財の保護やその理解への一助となりましたら幸いです。

最後に、医療法人杏林会村上記念病院様をはじめ発掘調査から報告書刊行に至るまでご協力賜りました関係各位、及び、調査に従事して下さった方々に対し、深甚から感謝申し上げます。

平成24年3月31日

中津市教育委員会
教育長 北山一彦

例　　言

1. 本書は中津市教育委員会が2010年度に行った大分県中津市字新魚町に所在する村上記念病院通所リハビリテーション施設増改築工事に伴う中津城下町遺跡新魚町地区の発掘調査事業の報告書である。
2. 確認調査は平成22年（2010）9月7日～9月10日まで行い、本調査は平成22年10月6日～11月4日まで実施した。報告書作成作業は平成23年度に行った。
3. 発掘調査及び報告書刊行に要した経費は、医療法人杏林会　村上記念病院の協力を得た。
4. 確認調査・本調査は浦井直幸が担当した。
5. 遺構の実測・撮影は浦井が行った。遺物の実測・撮影・浄書などは、雅企画㈲に委託した。遺構実測図の浄書、遺物整理作業は中津市歴史民俗資料館の浅田くるみ、岩崎弘子、金丸孝子、古市智子、土橋厚子の協力を得た。
6. 現場で用いた座標は世界測地系による。
7. 遺構の表記は下記のとおりである。
SK（土坑） SE（井戸） SD（溝状遺構）
8. 図面等記録類、出土遺物は中津市歴史民俗資料館にて保管している。
9. 報告書作成にあたっては下記の方々にご指導・ご協力いただいた。記して感謝申し上げます。
横澤　慈（大分県教育庁埋蔵文化財センター）
吉田　寛（大分県教育庁埋蔵文化財センター）（50音順・敬称略）
10. 本書の執筆・編集は浦井が行った。

目 次

卷頭図版	
序文	
例言	
第1章 調査の経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査体制	1
第2章 遺跡の位置と環境	2
第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	2
第3節 これまでの調査	4
第3章 調査の方法と成果	5
第1節 調査の方法	5
第2節 調査の成果	6
第4章 総 括	21
第1節 出土遺物について	21
第2節 遺構について	22
第3節 背削下水について	23
写真図版	27
報告書名抄録	33

挿 図 目 次

第1図 中津市内主要遺跡分布図	3
第2図 今回調査区及び周辺主要調査位置図	4
第3図 遺構配置図	5
第4図 調査区西壁土層	6
第5図 SK-1～8平面図・断面図	7
第6図 SK-9・11・13・14・20～23・SE-1・SD-1平面図・断面図	8
第7図 SK-1～4出土遺物	10
第8図 SK-4出土遺物	11
第9図 SK-4出土遺物	12
第10図 SK-5・6出土遺物	13
第11図 SK-7～21出土遺物	14
第12図 SK-22・23・SE-1出土遺物	15
第13図 調査区一括出土遺物	16
第14図 土師器小皿法量図	21
第15図 遺構変遷図	22
第16図 中津城総曲輪絵図	24
第17図 背割下水と堀	25

表 目 次

第1表 遺物観察表1 土器・瓦	19
第2表 遺物観察表2 木製品・金属器・石器・骨角器	20

写真図版目次

卷頭図版 SK-11出土陶器壺	
写真図版1 全景 SK-4 SK-6 SE-1 SD-1	29
写真図版2 出土遺物	30
写真図版3 出土遺物	31
写真図版4 出土遺物	32

第1章 調査の経過

第1節 調査に至る経緯

平成22年9月2日、医療法人杏林会村上記念病院より文化財保護法93条の届出が市教委になされた。既存の通所リハビリテーション施設を増改築する目的で工事は計画された。予定地は既存施設南側に接する個人宅の庭で、周囲を住宅に囲まれた約100m²の狭小な土地であった。計画地は中津城下町遺跡内に該当するため、市教委は確認調査を行う旨病院側へ回答した。試掘調査は9月7日～10日まで行い、2本のトレンチを設定し掘り下げを行った。その結果、地表下1mで近世陶磁器の出土する土坑を数基確認した。そこで病院側と調査期間・費用などについて協議を行い、本調査は平成22年度、報告書作成は平成23年度に行うこととなった。本調査は10月6日～11月4日まで実施した。

第2節 調査体制

平成22年度の体制は下記のとおり。（発掘調査）

調査主体 中津市教育委員会

調査責任者 北山 一彦（中津市教育委員会教育長）

調査事務 尾家 勝彦（ 同 文化振興課長）

田中布由彦（ 同 文化財係長）

平田 由美（ 同 文化財係員）

調査担当 浦井 直幸（ 同 文化財係員）

平成23年度の体制は下記のとおり。（整理・報告書刊行）

調査主体 中津市教育委員会

調査責任者 北山 一彦（中津市教育委員会教育長）

調査事務 藤原 義郎（ 同 文化振興課長）

田中布由彦（ 同 文化財係長）

平田 由美（ 同 文化財係員）

担当 浦井 直幸（ 同 文化財係員）

発掘調査は下記の皆さんの協力による。（50音順、敬称略）

今永夏樹 小川禮子 金崎ミチ子 角美枝子 田島律子 寺本紀一 寺本利子 広津トシ子

松本浩司 宮津しのぶ 森山勝城 若木和美

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

中津市は大分県の最北部に位置する。人口約8万6千人、面積491km²を誇り、北は周防灘に面し、西は福岡県、東は宇佐市、南は玖珠町・日田市と境を接する。英彦山に源を発する一級河川山国川が市内を南から北へ貫流し流域一帯を潤す。上中流域は山々に囲まれた地形で、山国川やその支流により開拓された河岸段丘上に集落は営まれる。頬山陽により絶景と称された奇岩・奇勝の多くは名勝耶馬溪として国の指定を受ける。下流域は沖積作用による県北最大の平野「沖代平野」と洪積台地「下毛原台地」が広がる。

中津城下町遺跡は、山国川河口右岸の沖積平野北西端に位置する。標高3～6mの低地に所在し中津城を扇の要として扇を広げた形に城下町が展開している。城下町地下の地山は基本的に黄褐色のローム層で山国川付近では砂層となる。

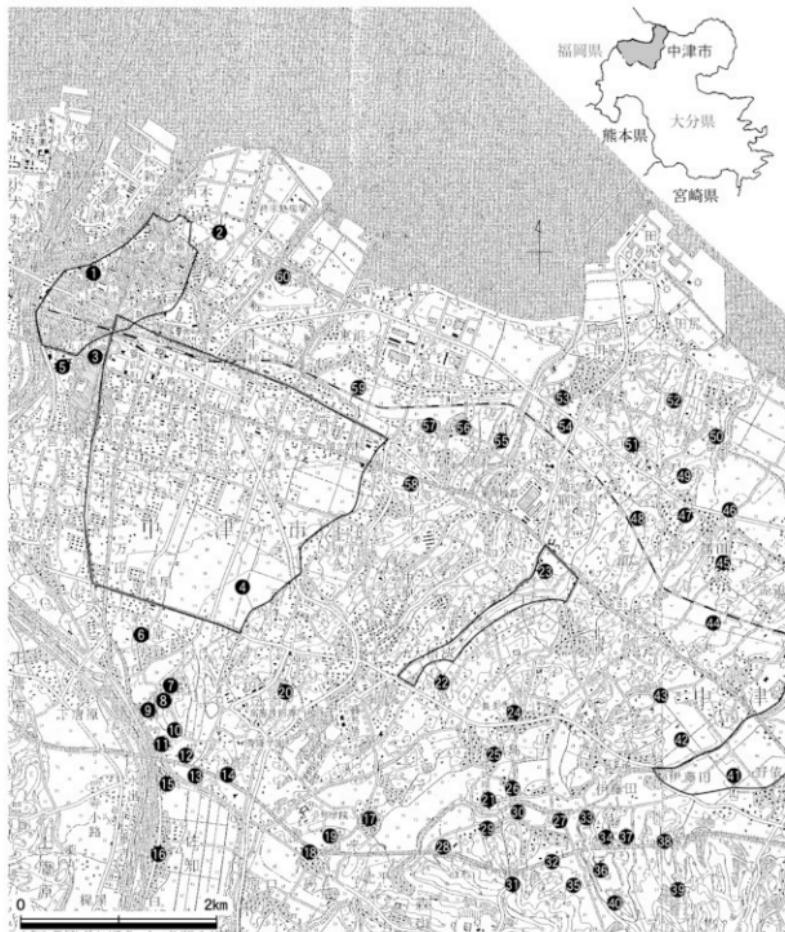
第2節 歴史的環境

市内の遺跡を概観すると旧石器時代の石器は才木遺跡（35）や大坪遺跡で発見されている。縄文時代は上畠成遺跡（43）で早期の無文土器が検出された。早期末から前期は黒水遺跡（18）で陥し穴が発見されている。遺跡数は縄文後期から増大する。植野貝塚やボウガキ遺跡（21）、女体像と見られる土偶が出土した高畠遺跡（5）が挙げられる。弥生時代では前期後葉から中期初頭の上ノ原平原遺跡（13）で貯蔵穴群が確認される。続く中期では二列埋葬の土墳墓・住居跡・溝が福島遺跡（25）で確認され、前期末から後期初頭の集落全域が森山遺跡（28）で検出された。古墳時代の遺跡としては亀山（亀塚）古墳（58）が挙げられるが、明治時代に調査せず破壊されたため詳細は不明である。その他の墳墓の多くは下毛原台地の西南に造営される。5世紀中ごろには山国川に面する勘助野地遺跡（12）で方形周溝墓が造営され、5世紀後半から7世紀前半にかけては上ノ原横穴墓群（11）が展開する。古墳時代後期には三保地域に岩井崎横穴墓群（29）、城山古墳群（34）、城山横穴墓群（33）などが見られる。また、7世紀から9世紀にかけて相原山首遺跡（7）で方墳が造られる。古墳時代後期の集落は諸田遺跡（45）や定留遺跡（47）でまとめて発見されている。

古代には寺院遺跡として、7世紀末に白鳳系の相原廃寺（6）が建立される。また、遅くとも8世紀初頭には沖代平野に条里制（4）が施行されたと考えられ、条里の南限は「勅使街道」と呼ばれる古代官道が走る。8世紀後半にはその官道に沿うて下毛郡衙正倉に推定される長者屋敷官衙遺跡（20）がある。また、諸田南遺跡（44）で掘立柱建物群や円面鏡が検出されている。須恵器や瓦を作成した生産遺跡は、踊ヶ迫窯跡（38）、草場窯跡（37）、洞ノ上窯跡などがある。集落遺跡としては古墳時代から10世紀まで続き縄釉陶器や墨書き土器が出土した三口遺跡がある。

中世は、長久寺の田丸城跡（24）など中世城館が市内各地に築かれる。16世紀末は黒田氏の入封によって中津城（1）が築城される。近年の調査によって、中津城は石垣に高度な構築技法が採用された現存する九州最古の近世城郭であることが判明した。

近世は関ヶ原の合戦後、黒田氏に替わって細川氏が入部し、城・城下町は整備・拡張される。城下の造営は小笠原氏が入部する1632(寛永9)年に完成を見る（中津城下町遺跡 2）。1717(享保2)年には奥平氏が入部し、1871(明治4)年の廢藩置県まで城下は同氏が統治した。



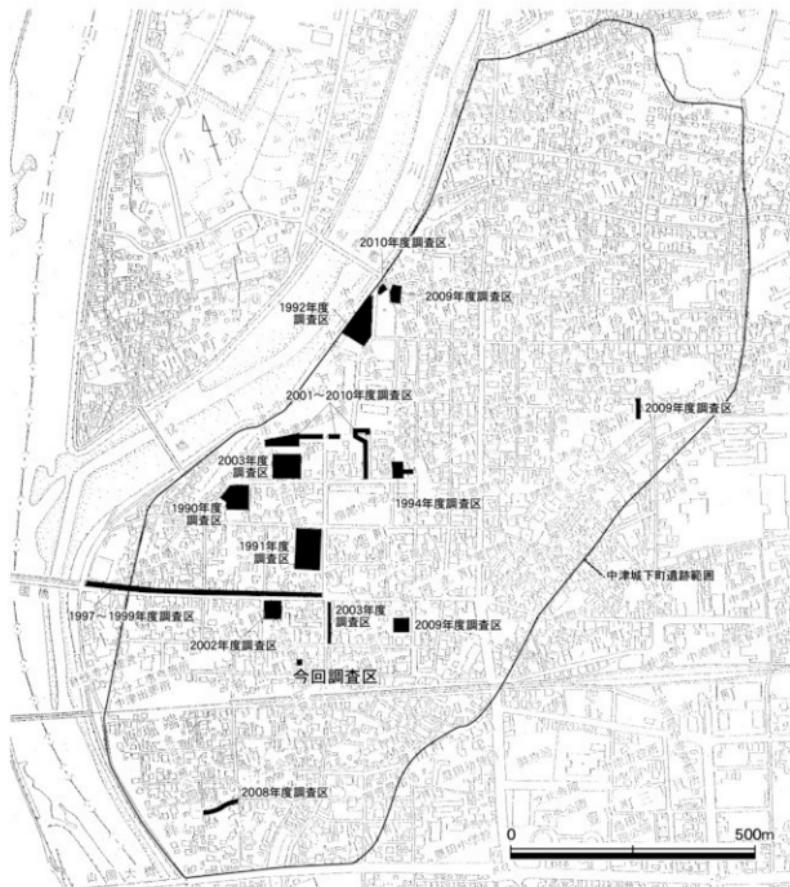
- | | | | | |
|--------------|--------------|-------------|-------------|--------------|
| 1. 中津城 | 13. 上ノ原平原遺跡 | 25. 福島遺跡 | 37. 草場窯跡 | 49. 和間貝塚 |
| 2. 中津城下町遺跡 | 14. 大池南遺跡 | 26. 福島地下式横穴 | 38. 踊ヶ迫窯跡 | 50. 定留鬼塚遺跡 |
| 3. 豊田小学校庭園遺跡 | 15. 佐知久保烟遺跡 | 27. 前田遺跡 | 39. ホヤ池窯跡 | 51. 是能遺跡 |
| 4. 冲代地区条里跡 | 16. 佐知遺跡 | 28. 森山遺跡 | 40. 大谷窯跡 | 52. 田尻大迫遺跡 |
| 5. 高畠遺跡 | 17. 加来居屋敷遺跡 | 29. 岩井崎横穴墓群 | 41. 野依遺跡 | 53. 舞手橋東段上遺跡 |
| 6. 相原庵寺 | 18. 黒水遺跡 | 30. 犬丸川流域遺跡 | 42. 野依地区条里跡 | 54. 是則遺跡 |
| 7. 相原山首遺跡 | 19. 大烟城跡 | 31. 洞ノ上窯跡 | 43. 上畠成遺跡 | 55. 全徳遺跡 |
| 8. 鶴市神社裏山古墳 | 20. 長者屋敷官衙遺跡 | 32. 安平遺跡 | 44. 諸田南遺跡 | 56. ガラスノ遺跡 |
| 9. 坂手隈城跡 | 21. ポウガキ遺跡 | 33. 城山横穴墓群 | 45. 諸田遺跡 | 57. 合馬遺跡 |
| 10. 算旗邸古墳群 | 22. 大悟法地区条里跡 | 34. 城山古墳群 | 46. 天貝川遺跡 | 58. 亀山古墳 |
| 11. 上ノ原横穴墓群 | 23. 原遺跡 | 35. 才木遺跡 | 47. 定留遺跡 | 59. 東浜遺跡 |
| 12. 勘助野地遺跡 | 24. 田丸城跡 | 36. 城山窯跡群 | 48. 定留貝塚 | 60. 古浜東遺跡 |

第1図 中津市内主要遺跡分布図 (S=1/50,000)

第3節 これまでの調査（第2図）

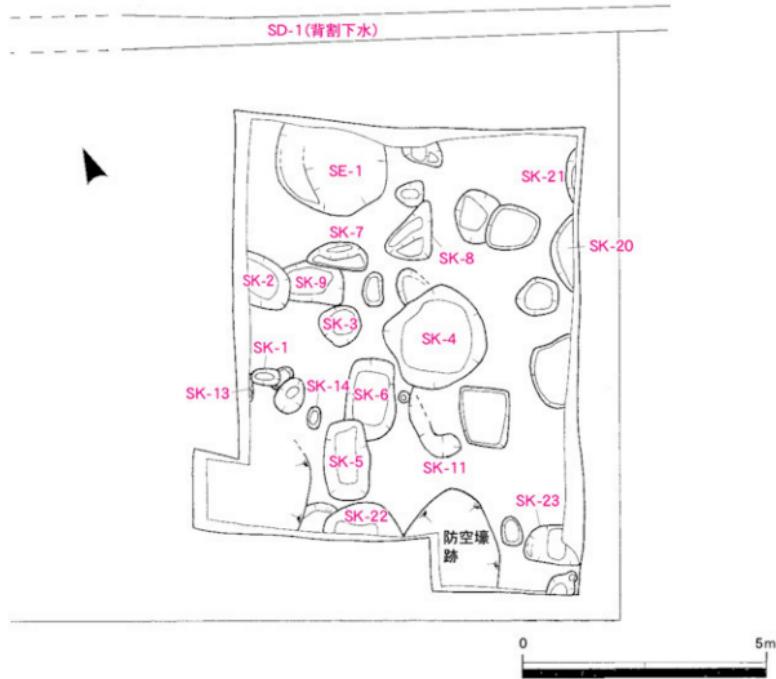
中津城・中津城下町遺跡は、1986～2010年にかけて約18地点で試掘・確認・本調査が行われている。その全てについては詳述しないが、2001～2010年度に石垣整備に伴う確認調査が行われ、中津城の石垣が九州の近世城郭で現存する最古のものであることが判明している。また、1990年度において城下の内堀・外堀に付随する土塁、通称「おかこい山」の調査が行われ、その構築方法の一端が解明された。1997～1999年度の県道拡幅に伴う殿町地区の調査では、屋敷の境界をなす溝、江戸時代の水道施設「御水道」や多数の陶磁器が出土し、当時の生活を知る資料が得られた。

今回調査を行ったのは城下町南部の町屋部分にある。これまで町屋を調査した例は、今回調査区から東に80mの2003年度調査区のみであり貴重な調査例となった。



第2図 今回調査区及び周辺主要調査位置図 (S=1/10,000)

第3章 調査の方法と成果



第3図 遺構配置図 (S=1/100)

第1節 調査の方法

調査地は個人宅の庭で、西は調査地と地続きの庭、東・南は宅地、北は背割下水を挟んで既存のリハビリ施設が建っていた。背割下水は下水や雨水などを流す近世の排水路であるが、町の境界としての性格をもつ。現在でも下水路より北側は諸町、南側は新魚町であり、今回の調査地点は新魚町側になる。調査時点、この庭はリハビリ施設西隣の住人の所有地であったため、調査地は近世からこの家屋の敷地であろうと推測していた。しかし、背割下水の存在、調査地の地番が新魚町である点などから近代以降に諸町側の住人が背割下水を超えて新魚町側の土地を敷地に取り込んだものと判断するに至った。よって、近世、調査地は南の通りに面して間口をもつ町屋の裏庭として利用されていたものと考え調査にあたった。

調査は、調査区を大きく東西に2分割して行った。まず西側調査区から着手し、表土は小型バックホーを使用して除去した。西側が終わると東側を掘削し、最後に南側の小範囲の掘削を行った。城下町調査のため、数面の遺構面の検出も念頭においた。検出した土坑など遺構の掘り下げは基本的に半蔵方法を採用した。

第2節 調査の成果

1) 層序 (第4図)

1～3層は近現代の層で60cm程の厚さをもつ。4層は近世か近代か判断がつかなかった。確実に近世の層といえるのは5～7層で、遺構は標高約4.4mの6層に掘り込まれている。7層は地山に似た橙色の層であるが、炭粒が少量混入しており地山ではない。今回図示していないが7層を80cm掘り下げるとき山国川の

氾濫原と思われる川石を含む無遺物層に到達する（標高3.4m）。この間、遺構は確認できておらず黄色のローム層も認めるることはできなかった。よって、本調査区では遺構は標高4.4m付近にのみ存在するものと考えた。また、7層は西側から東側にかけてゆるやかに降下しており、その上に6層に似た層が盛られ平坦面を作り出していることを確認している。低い地形の東側を6層を用いて盛土造成した可能性を指摘しう。

2) 遺構と遺物 (第5～13図)

遺構は調査区のほぼ全面から検出した。検出した遺構は、土坑29基、井戸1基、溝状遺構1条（背割下水）、柱穴状遺構である。遺物の時期は、17世紀後半～18世紀前半のものが主体で、17世紀前半のものが一定量出土した。また、調査区南側で防空壕跡の掘り込みも確認した。調査面積は約75m²で、遺物の数量はパンケース18箱分であった。以下、図化可能な遺物の出土を見た遺構を中心に説明する。

土坑

SK- 1 (第5・7図)

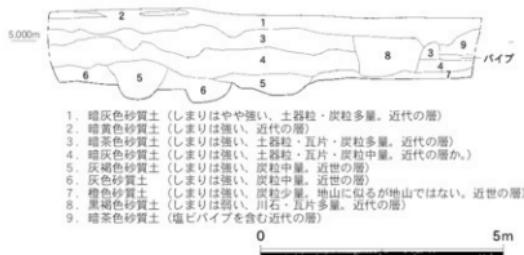
調査区西端に位置する。最大長60cm、最大幅34cm、深さ24cmを測り梢円形を呈する。遺物は少量出土している。1は18世紀後半の堺系擂鉢の底部。板状圧痕が残る。2は瓦質土器鉢の口縁部。他に19世紀代の棍棒の脚が出土している。

SK- 2 (第5・7図)

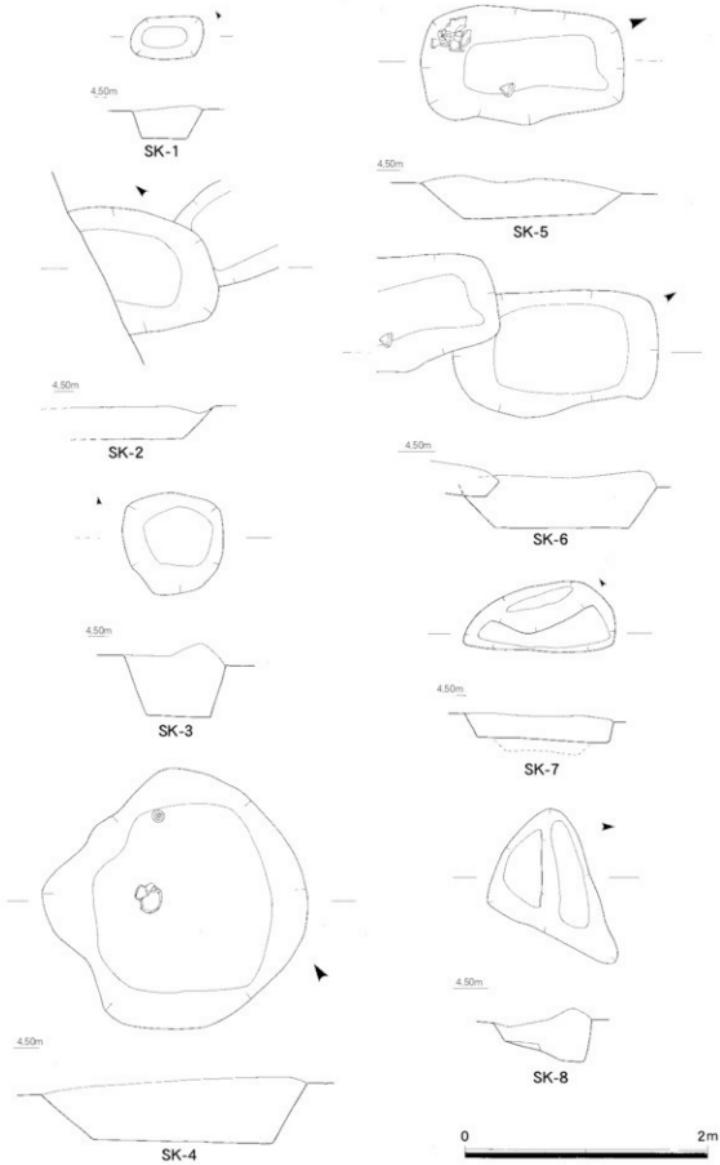
調査区西端に位置し、SK- 9を切る。最大長90cm+α、最大幅1m、深さ26cmを測り梢円形を呈する。遺物は少量出土している。3は1630～50年代の肥前窯器碗。4は瓦質土器火鉢の口縁部。他に土師質のメンコ型土器が2点出土した。

SK- 3 (第5・7図)

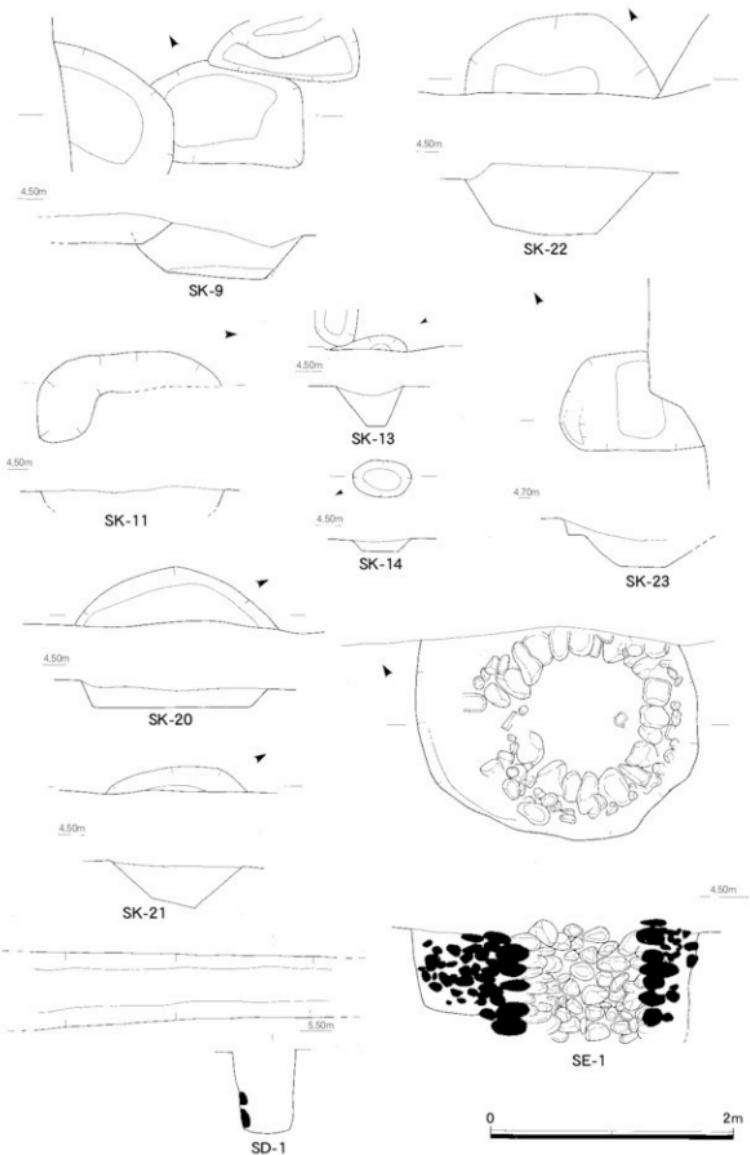
調査区中央西よりに位置する。最大長84cm、最大幅80cm、深さ60cmを測り梢円形を呈する。遺物



第4図 調査区西壁土層 (S=1/100)



第5図 SK-1～8 平面図・断面図 (S=1/40)



第6図 SK-9・11・13・14・20～23・SE-1・SD-1 平面図・断面図 (S=1/40)

は少量出土している。5は1630～50年代の肥前磁器小杯。6は唐津系陶器碗。7は瓦質土器火鉢の口縁部。8は瓦質土器鉢の口縁部である。この他、17世紀後半～末頃の磁器片や瓦、土師質土器小皿などが出土している。

SK- 4 (第5・7～9図)

調査区中央に位置する。最大長216cm、最大幅212cm、深さ54cmを測り楕円形を呈する。底面はほぼ平坦で東側の立ち上がりが西側より急になる。検出した土坑の中で平面規模は最大である。遺物は多量に出土し、その数はパンケース6箱分を数えた。9は1630～50年代の肥前磁器小杯でいわゆる初期伊万里。10は1690～1740年代の肥前系磁器碗。11は17世紀後半の肥前系陶胎染付磁器碗。12は17世紀後半～18世紀前半の異器手碗とよばれる唐津系磁器碗。13は18世紀前半の唐津系陶器碗。白土で刷毛目を施し、高台に砂が付着する。14は17世紀後半の肥前系磁器皿。見込は蛇ノ目釉剥ぎを行う。内ノ山窯産。15は17世紀末～18世紀前半の肥前磁器色絵皿。16は17世紀後半の肥前磁器皿。見込に花、高台内に「福」の字。17は17世紀末～18世紀前半の肥前系磁器仏飯器。18は18世紀代の肥前陶器瓶底部。19は17世紀前半の唐津系陶器甕。20は唐津系陶器鉢。21は陶器で壺か。22は17世紀前半の福岡系陶器鉢。内面に砂目3か所あり。23は関西系陶器の底部。24は外面に雷文を型打ちする焼き締め陶器。25は18世紀後半の堺系陶器擂鉢。26は擂鉢。27は17世紀後半の唐津系陶器擂鉢。28は備前系擂鉢。29は擂鉢。30は18世紀後半の唐津系陶器擂鉢。31は瓦質土器火鉢の上半分。32は瓦質土器焙烙。33は瓦質土器甕。34は土師質土器鉢。35は土師質土器焙烙。36は土師質土器鉢。37～39は口縁部に煤の付着する土師質土器灯明皿。40は土師質土器鉢。41は用途不明の土師質土器。穿孔があるが貫通しない。42は木製品。ハケの柄か。43は煙管の吸口で、表面に別金属による線（金色）あり。内部に管状の木質残る。44は寛永通宝。この他に瓦や小動物の骨、多種類の擂鉢片、混ざりこみであろうガラス片も出土している。

SK- 5 (第5・10図)

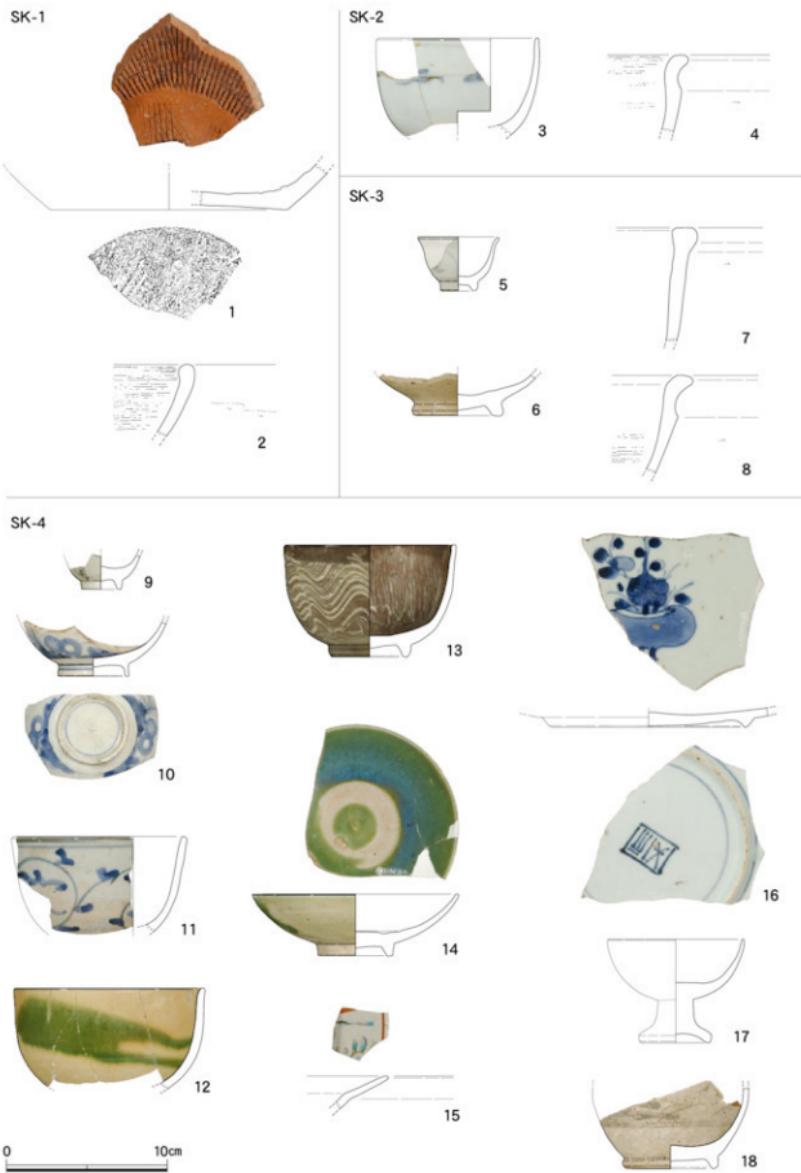
調査区南に位置し、SK- 6を切る。最大長168cm、最大幅92cm、深さ34cmを測り長方形を呈する。少量の遺物が出土している。45は一重網目文をもつ1630～50年代の肥前磁器碗。46は17世紀前半唐津系擂鉢。外面底部付近に凹み4か所あり。

SK- 6 (第5・11図)

調査区南に位置し、SK- 5に切られる。最大長168cm、最大幅100cm、深さ40cmを測り長方形を呈する。遺物は中量出土している。47は雷文を印刻する15世紀代の青磁碗。48は水辺風景を描く1630～50年代の肥前系磁器碗。初期伊万里。内底に砂が付く。49は内面に花唐草を描く1630～50年代の肥前磁器皿。50は1600～30年代の肥前磁器溝縁皿。歪みが大きい。51は擂鉢。52は17世紀後半の唐津系陶器碗。53は1600～30年代の唐津系陶器底部。高台に胎土目痕あり。54は瓦質土器焙烙。55は瓦質土器火鉢。

SK- 7 (第5・11図)

調査区北に位置し、SK- 9を切る。最大長124cm、最大幅58cm、深さ14cmを測り半月状を呈する。遺物は少量出土している。56は瓦質土器火鉢である。他に微細な陶磁器片が出土している。



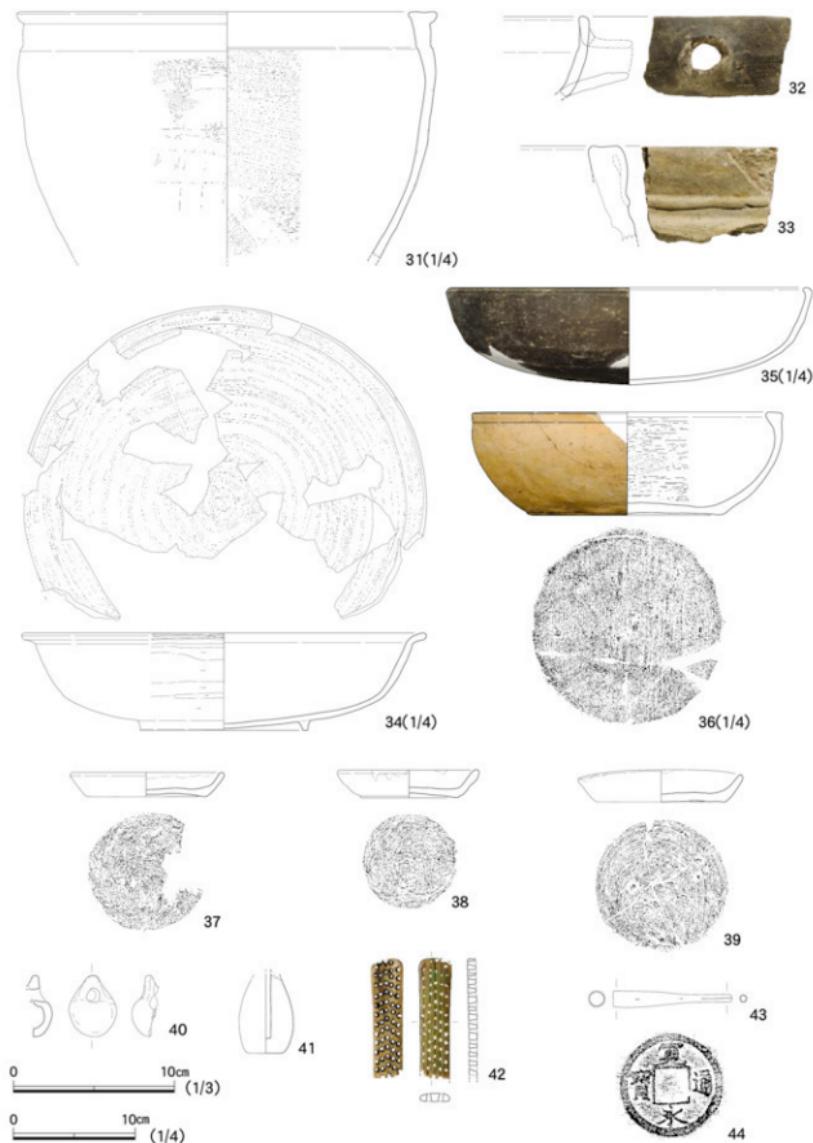
第7図 SK-1~4 出土遺物 ($S=1/3$)

SK-4



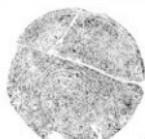
第8図 SK-4 出土遺物 (S=1/3, 1/4)

SK-4



第9図 SK-4 出土遺物 (S=1/3, 1/4)

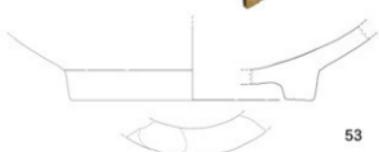
SK-5



46(1/4)



52



53

0

10cm

(1/3)

0

10cm

(1/4)

SK-6



50



51



54



55

第10図 SK-5・6 出土遺物 (S=1/3, 1/4)

SK-7



56

SK-8



57

SK-9



58



59



60

SK-11



61

SK-13



62



第11図 SK-7~21 出土遺物 (S=1/3)

SK-14



63

SK-20



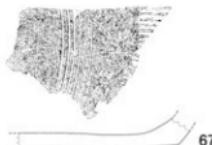
64



65



66



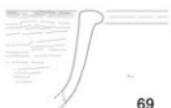
67

SK-21



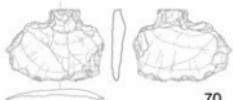
68

SK-22



69

SK-23



70



71



72



SE-1



73



74



75



76



77



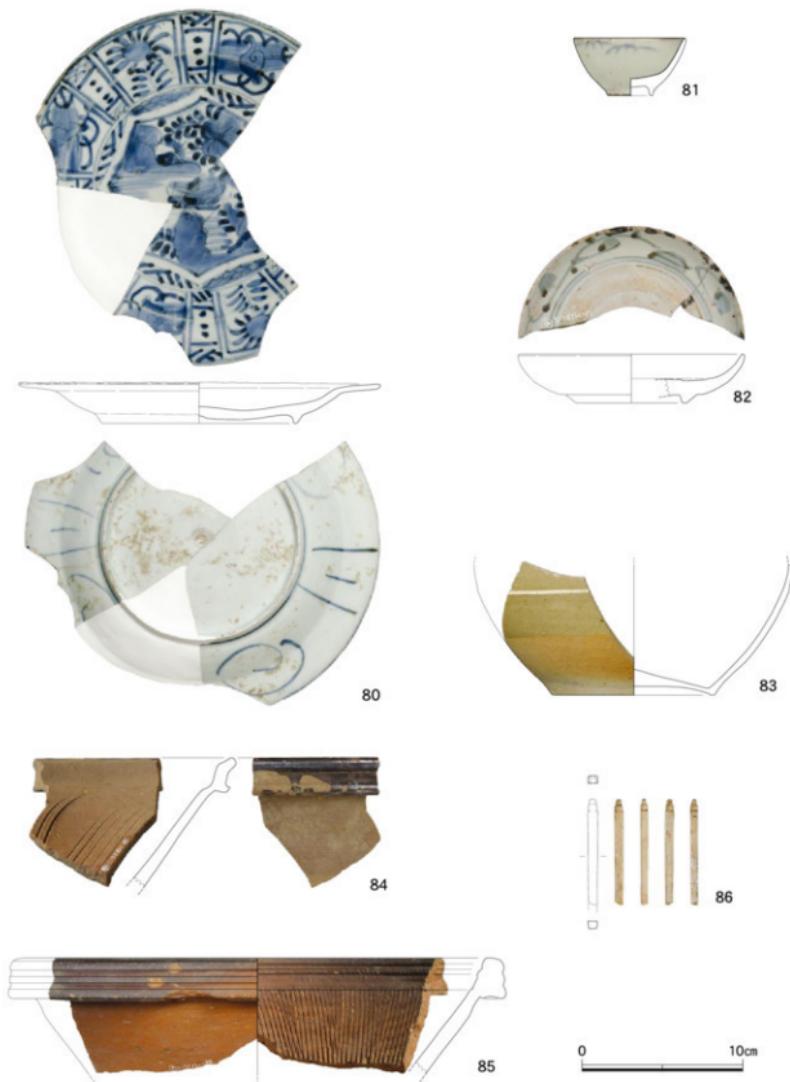
78



79

第12図 SK-22・23、SE-1 出土遺物 (S=1/3)

一括



第13図 調査区一括出土遺物 (S=1/3)

SK- 8 (第5・11図)

調査区中央北よりに位置する。最大長128cm、最大幅96cm、深さ40cmを測り三角形の崩れた形状を示す。遺物は少量出土している。57は土師質土器鉢である。他に瓦質土器や擂鉢の破片が出土している。

SK- 9 (第6・11図)

調査区中央北よりに位置し、SK- 2と7に切られる。最大長108cm+ α 、最大幅84cm、深さ40cmを測り楕円形を呈する。遺物は少量出土している。58は1600～30年代の唐津系磁器鉢で高台に砂目が5か所残る。59は17世紀前半で灰落としの唐津系磁器碗。口縁部に煤が付着し、打ち欠かれている。60は17世紀前半の唐津系磁器溝縁皿。この他に瓦質土器片が出土している。

SK-11 (第6・11図)

調査区中央南よりに位置する。最大長152cm、最大幅64cm、深さは計測ミスにより判然としない。歪な楕円形を呈する。遺物は少量出土している。61は備前系陶器壺である。胴部に「雲丹」、肩部に「□□つば」の印刻がある。他に17世紀末～18世紀前半の異器手碗などが出土している。

SK-13 (第6・11図)

調査区西端に位置する。最大長64cm+ α 、最大幅12cm+ α 、深さ36cmを測り、大部分が調査区外に及ぶ。62は17世紀前半の福岡系陶器鉢。

SK-14 (第6・11図)

調査区中央西よりに位置する。最大長48cm、最大幅28cm、深さ8cmを測り、楕円形を呈する。63は瓦質土器鉢。他に陶磁器片など少量の遺物が出土している。

SK-20 (第6・11図)

調査区東端に位置する。最大長160cm+ α 、最大幅48cm+ α 、深さ16cmを測り、大部分は調査区外に及ぶ。遺物は少量出土している。64は1810～60年代の肥前系磁器端反碗。外面に綾織・雪輪、内面に松葉繋ぎを描く。65は18世紀後半の肥前系色絵皿。焼き繼ぎ痕あり。66は17世紀末～18世紀前半の唐津系陶器灰落とし。67は堺系陶器擂鉢。他に瓦片なども出土している。

SK-21 (第6・11図)

調査区東端北に位置する。最大長116cm+ α 、最大幅24cm+ α 、深さ36cmを測り、大部分は調査区外に及ぶ。遺物は少量出土している。68は18世紀後半の肥前系磁器端反碗。二重格子を描く。他に磁器片・瓦質土器片が出土している。

SK-22 (第6・12図)

調査区東端北に位置する。最大長160cm+ α 、最大幅64cm+ α 、深さ60cmを測り、東側を防空壕跡により切られる。その範囲は調査区外に及ぶ。69は瓦質土器鉢。他に18世紀前半頃の陶磁器片が少量出土している。

SK-23 (第6・12図)

調査区南東端に位置する。最大長116cm + α 、最大幅80cm、深さ24cmを測り、その範囲は調査区外に及ぶ。遺物は少量出土した。**70**は縄文時代の石匙。重さ19.5 gを測り、石材はガラス質安山岩である。混入であろう。**71**は1630～50年代の肥前磁器輪花皿。内面に花弁を陽刻し、見込に花唐草を描く。初期伊万里。**72**は陶器皿。備前系か。口縁部に一部煤が付着するため灯明皿として使用されている。この他瓦質土器片が出土している。

井戸

SE- 1 (第6・12図)

調査区北端に位置し、一部調査区外に及ぶ。石組み井戸で掘方最大長232cm、最大幅176cm + α 、井戸枠は円形で直径92cmを測る。約150cm掘り下げたが、崩落回避のため掘削を中止した。掘方西側は一段のテラスをもつ。井戸枠は川原石を用い、一石のみ花崗岩が見られた。井戸枠裏側は井戸枠のものより小型の川原石を栗石として用いる。遺物は少量出土した。**73**は磁器で鉢か。掘方より出土。**74**は17世紀末～18世紀前半の唐津系呪器手碗。**75**は17世紀後半～18世紀前半の陶器碗。**76**は18世紀前半の唐津系陶器皿。内面に刷毛目あり。**77**は1630～50年代の肥前磁器皿。見込に笛を描く。初期伊万里。**78**は瓦質土器擂鉢。**79**は丸瓦片。出土遺物により遺構の開削・廃棄に大幅な時期差はないように思われる。

溝状遺構

SD- 1 (第6図)

調査区外の北側、諸町と新魚町の間に所在する背割下水である。敷地境としてブロックやフェンスが上部に建てられていたため発掘調査は行わず、平面・断面測量のみ行った。長さ10m + α 、幅56cm、深さ64cmを測る。現況では壁面にモルタルが塗布され一部川原石が露出していた。近世は両側に川原石を積み上げていたものと考えられる。調査後溝は埋められ、現在塩化ビニール管が敷設されている。

調査区内出土遺物

表土剥ぎにおいて一定量の遺物が出土した。**80**は1650～70年代の肥前磁器岩草花虫文輪花皿。**81**は18世紀後半～19世紀代の肥前磁器小杯。**82**は18世紀中頃～末の肥前磁器皿。口縁部に一部煤が付着するため灯明皿として使用した様子。**83**は18世紀後半～19世紀前半の関西系陶器。壺か。**84**は丹波系陶器擂鉢。**85**は18世紀後半の堺系陶器擂鉢。**86**は用途不明の骨角器。四角柱の先端を五輪塔の空風輪状に削り残す。



調査風景

遺物観察表1 土器・瓦 単位: cm

No	遺構番号	器種・種別	法量(cm)			成形	装飾		製作地	製作年代	備考	図版No
			口径	器高	底径		繪付軸渠	文様				
1	SK-1	陶器縦鉢	—	(2.8)	(14.6)	ロクロ			堺	18C後半	底部板状圧痕あり 外転復元	7
2	SK-1	瓦質土器縦鉢	—	(4.5)	—						外面スス付着	7
3	SK-2	磁器縦	(9.8)	(6.0)	—	ロクロ	染付・透明釉	(外)不明・團線	肥前	1630~50	外転復元	7
4	SK-2	瓦質土器火鉢	—	(4.7)	—						外転復元	7
5	SK-3	磁器小杯	4.9	3.3	2.2	ロクロ	染付・透明釉	(外)草花	肥前	1630~50		7
6	SK-3	陶器縦	—	(2.6)	5.4	ロクロ	灰釉		唐津		高台に紗付着 一部外転復元	7
7	SK-3	瓦質土器火鉢	—	(7.0)	—							7
8	SK-3	瓦質土器縦	—	(6.1)	—							7
9	SK-4	磁器小杯	—	(2.1)	2.4	ロクロ	染付・透明釉	(外)草花	肥前	1630~50	初期伊万里	7
10	SK-4	磁器縦	—	(3.4)	(4.4)	ロクロ	染付・透明釉	(外)草花・團線	肥前	1690~ 1740	一部外転復元 コンニヤ ク印判 高台・重團線	7
11	SK-4	磁器縦	(10.4)	5.9	—	ロクロ	染付・透明釉	(外)草花・團線	肥前	17C後半	外転復元	7
12	SK-4	磁器縦	11.6	(6.2)	—	ロクロ	團線縦・透明釉		唐津	17C末~ 18前半	呉器手鏡	7
13	SK-4	陶器縦	10.3	6.9	4.6	ロクロ	白土・鉄釉	(外)刷毛目 (内)刷毛目	唐津	18C前半	見込に付着物あり 高台に紗付着	7
14	SK-4	磁器縦	(12.4)	3.8	4.6	ロクロ	團線縦		肥前	17C後半	見込蛇口付 高台に紗付着 一部外転復元 内山窯	7
15	SK-4	磁器縦	—	(2.1)	—	ロクロ	色絵・透明釉	(内)菊花	肥前	17C~ 18前半		7
16	SK-4	磁器縦	—	(1.2)	(11.9)	ロクロ	染付・透明釉	(外)團線 (見込)花頭・花	肥前	17C後半	外転復元 高台内面一重 團線 磁	7
17	SK-4	磁器仏壇	(8.3)	6.4	4.2	ロクロ	白磁		肥前	17C~ 18C前半	高台に一部紗付着 一部外転復元	7
18	SK-4	陶器瓶	—	(5.0)	5.4	ロクロ	染付・透明釉	(外)草花	肥前	18C代	燒成不良 一部外転復元	7
19	SK-4	陶器瓶	—	(4.2)	—	ロクロ	焼き締め・鉄釉		唐津	17C前半		8
20	SK-4	陶器縫	(21.4)	(9.9)	—	ロクロ	焼き締め		唐津			8
21	SK-4	陶器	(3.6)	(5.0)	—	ロクロ	灰釉				内部に付着物あり 内面に紗口3ヶ所あり	8
22	SK-4	陶器縫	(13.6)	5.4	6.0	ロクロ	鉄釉		福岡系	17C前半	一部外転復元	8
23	SK-4	陶器	—	(6.1)	—	ロクロ	鉄釉		関西系		脚1ヶ所残存 一部合成立	8
24	SK-4	陶器	—	(2.5)	—	型打ち	灰釉・鉄釉	(外)雷文			焼き締め陶器	8
25	SK-4	陶器縫	—	(5.3)	—	ロクロ	焼き締め				一部合成立	8
26	SK-4	陶器縫	—	(3.5)	—	ロクロ	鉄釉				外表面底付近に凹み4ヶ所あり	8
27	SK-4	陶器縫	30.0	12.7	11.0	ロクロ	焼き締め・鉄釉		唐津	17C後半	底部回転糸切り痕あり	8
28	SK-4	陶器縫	22.8	9.7	9.8	ロクロ	焼き締め					8
29	SK-4	陶器縫	(24.0)	(5.5)	—	ロクロ	焼き締め				外転復元	8
30	SK-4	陶器縫	(34.0)	(10.2)	—	ロクロ	焼き締め・鉄釉		唐津	18C後半	外転復元	8
31	SK-4	瓦質土器火鉢	(34.0)	(20.3)	—						外転復元	9
32	SK-4	瓦質土器始格	—	(5.0)	—							9
33	SK-4	瓦質土器塊	—	(5.8)	—							9
34	SK-4	土師質土器縫	33.2	8.0	13.7						外転復元	9
35	SK-4	土師質土器始格	(29.0)	8.0	—				高村		外表面スス付着 外転復元	9
36	SK-4	土師質土器縫	(25.4)	8.5	16.0						底部板状圧痕あり 部外転復元	9
37	SK-4	土師質土器縫	9.2	1.5	7.4						口縁部~体部スス付着 底部回転糸切り痕あり ヘラ記号	9
38	SK-4	土師質土器縫	8.5	1.7	6.0						口縁部一部スス付着 底部回転糸切り痕あり	9
39	SK-4	土師質土器縫	10.0	2.0	8.0						口縁部一部スス付着 底部回転糸切り痕あり	9
40	SK-4	土師質土器十鈴	長3.8	幅2.9	—							9
41	SK-4	土師質土器	—	(4.9)	2.2							9
45	SK-5	磁器縫	—	(5.4)	(3.9)	ロクロ	染付・透明釉・鉄釉	(外)重團線	肥前	1630~50	外転復元	10
46	SK-5	陶器縫	30.3	11.2	11.4	ロクロ	鉄釉		唐津	17C前半	外表面底部付近に凹み4ヶ所あり 底部回転糸切り痕あり	10
47	SK-6	磁器縫	—	(5.5)	—	ロクロ	青磁	(外)雷文(陰刻) (内)不明(陰刻?)	明	15C	龍泉窯	10
48	SK-6	磁器縫	10.6	6.6	4.9	ロクロ	染付・透明釉	(外)水波風景	肥前	1630~50	初期伊万里 内底に紗付着	10
49	SK-6	磁器縫	12.3	3.6	4.4	ロクロ	染付・透明釉	(内)花唐草・團線	肥前	1630~50	高台に紗付着 溝縁部	10
50	SK-6	磁器縫	—	(2.1)	—	ロクロ	灰釉		肥前	1600~30	漆み大 見込付着物あり	10
51	SK-6	陶器縫	—	(7.9)	—	ロクロ	焼き締め					10
52	SK-6	陶器縫	—	(4.0)	4.7	ロクロ	白釉	(外)刷毛目 (内)刷毛目	唐津	17C後半	燒成不良 一部外転復元	10

No	遺構 番号	器種・種別	法量(cm)			成形	裝飾		製作地	製作年代	備考	図版 No
			口径	器高	底径		繪付釉薬	文様				
53	SK-6	陶器	—	(4.6)	(15.0)	ロクロ	白釉・鉄釉		唐津	1600~30	見込に砂目あり 高台端部に膚目痕あり 反転復元	10
54	SK-6	瓦質土器柄瑠璃	—	(3.9)	—							10
55	SK-6	瓦質土器火鉢	—	(5.9)	—							10
56	SK-7	瓦質土器火鉢	—	(3.7)	—							11
57	SK-8	土師質土器鉢	(17.2)	4.0	(12.0)						反転復元	11
58	SK-9	磁器鉢	—	(3.6)	4.2	ロクロ			唐津	1600~30	高台に砂目5ヶ所あり 一部反転復元	11
59	SK-9	磁器碗	(9.8)	(4.7)	—	ロクロ	灰釉		唐津	17C前半	口縁部入ス付着 (灯明細に転用か?) 口縁部にちぎり 一部合成復元・反転復元	11
60	SK-9	磁器皿	(13.8)	(2.4)	—	ロクロ	灰釉		唐津	17C前半	溝縁皿 全面買入あり 反転復元	11
61	SK-11	陶器瓶	5.0	7.1	5.0	ロクロ	燒き締め	(外)文字(羅刻)	備前			11
62	SK-13	陶器鉢	(25.0)	(7.7)	—	ロクロ	黒釉		福岡系	17C前半	反転復元	11
63	SK-14	瓦質土器鉢	—	(3.0)	—	ロクロ						11
64	SK-20	磁器碗	(9.8)	5.5	4.0	ロクロ	染付・透明釉		肥前	1810~60	端反襯 一部反転復元	11
65	SK-20	磁器皿	—	(2.3)	—	ロクロ	色絵・染付・透明釉	(外)草花・圓線 (内)松竹梅	肥前	18C後半	肥前色絵皿(金彩) 焼き離ぎ痕あり	11
66	SK-20	陶器灰落とし	—	(4.3)	4.4	ロクロ	灰釉・鉄釉?		唐津	17C末~ 18C前半	反転復元	11
67	SK-20	陶器桶鉢	—	(1.9)	—	ロクロ	鉄釉		那			11
68	SK-21	磁器碗	9.2	5.7	3.8	ロクロ	染付・透明釉	(外)二重格子 (内)格子・圓線 (見込)格子	肥前	18C後半	端反襯	11
69	SK-22	瓦質土器鉢	—	(5.8)	—	ロクロ						12
71	SK-23	磁器皿	(13.9)	2.6	6.2	ロクロ	染付・透明釉 型打ち	(内)花卉(陽刻) (見込)花唐草	肥前	1630~50	輪花組初期伊万里 内面陽刻あり 高台に砂付着 外面部刷毛痕あり 反転復元	12
72	SK-23	陶器皿	7.6	1.5	4.0	ロクロ	燒き締め		備前?		口縁部・瀧ス付着	12
73	SE-1	磁器	(21.2)	(4.0)	—	ロクロ	白磁釉				全面買入あり 反転復元	12
74	SE-1	磁器碗	—	(2.5)	4.6	ロクロ	青磁釉		唐津	17C末~ 18C前半	乳摺手鏡 全面買入あり	12
75	SE-1	陶器碗	(12.0)	7.5	5.2	ロクロ	鉄釉? 薙灰釉?	(外)不明		17C後半~ 18C前半	被熱加工 一部反転合成	12
76	SE-1	陶器皿	—	(2.7)	(9.4)	ロクロ	白土・綠釉	(内)刷毛目	唐津	18C前半	反転復元	12
77	SE-1	磁器皿	(14.2)	3.2	6.0	ロクロ	染付・透明釉	(見込)籠・圓線	肥前	1630~50	初期伊万里 高台に付着物あり 一部反転復元	12
78	SE-1	瓦質土器插鉢	—	(6.8)	—							12
79	SE-1	丸瓦	—	(5.3)	厚2.1						一部合成立	12
80	一括	磁器皿	21.3	2.5	12.0	ロクロ	染付・透明釉	(外)幾何文 (内)草花・花・宝 (見込)山水・花樹・虫	肥前	1650~70	芙蓉手 石草花虫文輪花 皿 目跡1ヶ所残存 高台端部に砂付着	13
81	一括	磁器小杯	6.9	3.5	2.7	ロクロ	染付・透明釉	(外)箋	肥前	18C後半~ 19C		13
82	一括	磁器皿	(13.7)	3.0	(6.8)	ロクロ	染付・透明釉	(内)唐草	肥前	18C中~末 瀧	波佐見燒見込蛇ノ目釉洞 口縁部・瀧ス付着	13
83	一括	陶器	—	(8.0)	10.0	ロクロ	灰釉・白土	(外)緑(イッチン)	関西系	18C後半~ 19C前半	一部反転復元	13
84	一括	陶器桶鉢	—	(8.0)	—	ロクロ	燒き締め・鉄釉					13
85	一括	陶器桶鉢	(30.0)	(7.2)	—	ロクロ	燒き締め					13

遺物観察表2 木製品・金属器・石器・骨角器 単位:cm

No	遺構 番号	器種	種別	法量(cm)				備考	図版 No
				長さ	直径	幅	底径		
42	SK-4	木製品	14げ?	長(7.3)	幅2.0	厚0.5	5.9	一部合成立	9
43	SK-4	金属器	煙管 (吸口)	長7.3	幅1.0	—	5.8	別金属による緑(金色)あり 内部に管状の本質残る	9
44	SK-4	金属器	古錢	—	—	—	1.7		9
70	SK-23	石器	石甃	長4.4	幅6.0	厚0.8	19.85		12
86	一括	骨角器	?	長(6.5)	幅0.6	厚0.5	2.3		13

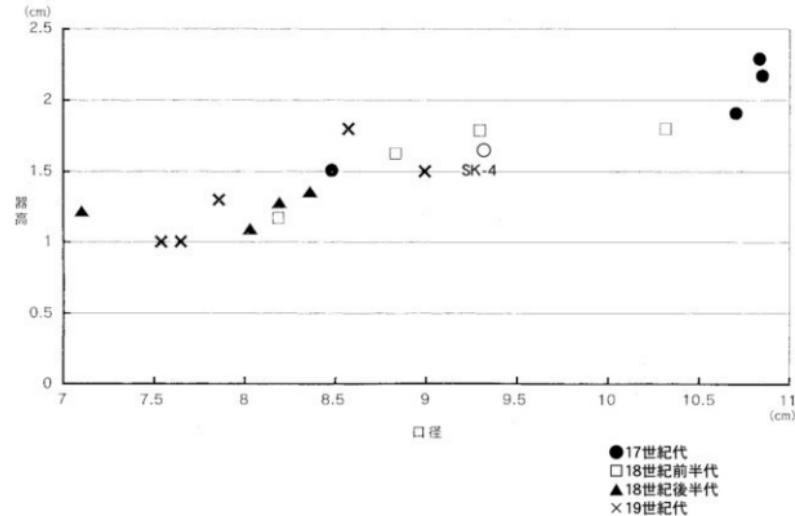
第4章 総括

第1節 出土遺物について

当地区で検出した遺構の大半は土坑であり、出土遺物は17世紀後半～18世紀前半代のものが大半を占める。17世紀前半代の初期伊万里も一定量出土したが良好な残存状況から17世紀後半まで伝世したものと考える。また、多種類の鉢類が多量に出土しており、産地は堺・丹波・備前・唐津に及ぶ。一方、縄文時代の石器、15世紀の青磁は該期の遺構が周辺に存在する、もしくは存在した可能性を示唆する。

調査区中央に位置するSK-4からは、陶磁器類、瓦質土器、土師質土器、金属器、木製品などパンケース6箱分の遺物が出土した。一部17世紀前半代のものを含むが、17世紀後半～18世紀前半代の遺構と考え差し支えない。遺構から約40点の土師質土器小皿が出土している。今回すべてを図化していないが、この中で口径・器高の計測可能な22点を抽出し計測を行った。その結果、口径は7.7～10.5cm（平均9.35cm）、器高は1.2～1.9cm（平均1.58cm）を測る。平均口径は10cmを切り、平均器高は1.5cmと低い。

第14図は、このデータを殿町地区出土土師器小皿法量図に落としたものである（○以外は殿町地区出土小皿データ 2004中津市教育委員会）。当地区的○は18世紀前半代の□の近くに位置することから、概ね周辺の調査成果と合致する。該期の土師器法量の特徴を追認する結果となった。

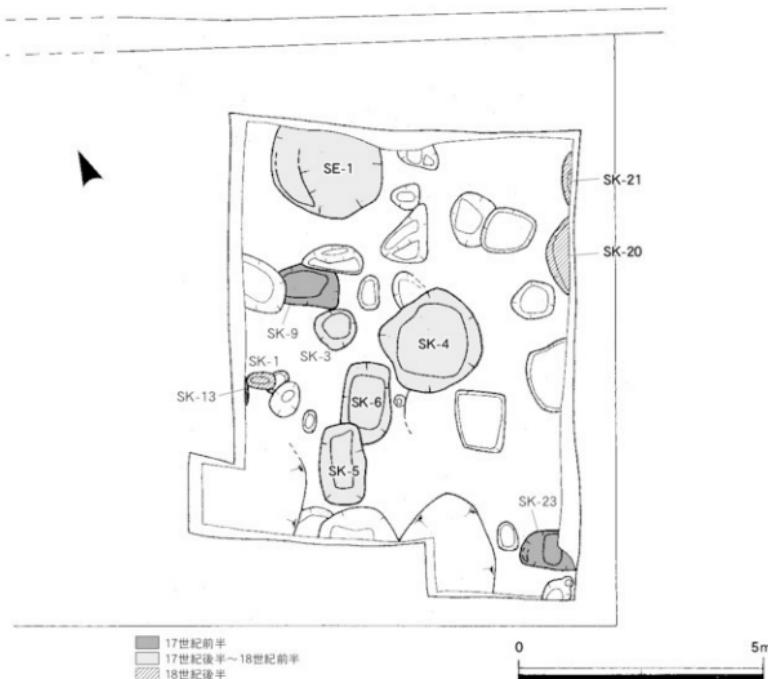


第14図 土師器小皿法量図

第2節 遺構について

検出した主な遺構は土坑29基、井戸1基である。土坑の大半は生活により生じたごみなどを捨てた廃棄土坑と考えられ、火災処理土坑は見つかっていない。遺物の出土量によりすべての遺構の年代を把握できたわけではないが、第15図に遺構変遷図を作成した。17世紀前半代はSK-9、13、23があり、SK-9は他の土坑により切られている。遺構配置状況はまばらである。17世紀後半～18世紀前半代はSK-3～6、SE-1がある。土坑は主に調査区中央に展開し、17世紀前半代の遺構より平面規模は大きい。18世紀後半代はSK-1、20、21がある。20、21は調査区外に及ぶが大型の土坑の可能性がある。

今回は、小範囲の調査であったため時期別に遺構の形態変化を把握することに限界があった。しかし、当調査区においては、時代が下がるにつれて平面規模が大型化する傾向を看取することができた。



第15図 遺構変遷図 (S=1/100)

第3節 背割下水について

調査区北側には背割下水（SD-1）が存在した。背割下水は他の城下町でも確認されており、大坂城下町船場の背割下水はよく知られている。平成17年度、大阪市は背割下水などを「太閤下水」という名称で文化財史跡に指定している（2007山野）。中津城下町遺跡の背割下水の調査・報告例は、昭和61年6月25日付けで大分県教育庁文化課より市教委に依頼された『「下水」または「下水道」に係る地域の史跡・伝承・地名等の調査について』の回答（以下、回答文書）しか知らない。このため以下に中津城下町の背割下水について現時点での範囲を記述することとする。

（1）絵図

中津城・中津城下町を描いた絵図は、平成22年度段階で20点報告されている（2011中津市教育委員会）。その中で背割下水について参考になるものは、寛文3年（1663）以前の「中津城總曲輪繪図」と1829～1833年の「中津城下図」である。第16図は中津藩政史料刊行会によって復元された「中津城總曲輪繪図」である。武家屋敷・組屋敷・町屋の区画が長方形で記され、中央にそれを分割するような実線が引かれている。これは屋敷境・町屋境と考えられ、その部分に背割下水が存在するものと考えられる。

（2）文献

享保3年（1718）～文久2年（1862）までの中津町会所の記録である『惣町大帳』には「溝」という言葉が登場する。回答文書はこれを下水路と考え、溝掃除を行っているか『溝御巡検』があるとし、その手順を記述している。要約すると、町会所がまず道順・休憩場所を決めるがその間に溝掃除を行う。そして、町奉行など最高で24名の役人が巡見し、終了後食事の接待を行う。巡見した町名を奉行所へ提出する。すべての工程はだいたい20日間というものである。また、福澤諭吉旧居南側に存在した15m×20m程度の長方形の堀「わくだ堀」の堀さらへの手順も詳述している。概ね溝御巡検のものと同じであるが期間や役人の数が少ない。他に『惣町大帳』には、「一、同日、悪土堀垣之儀、唯今迄 上方被 仰付候處、向後^ニ屋敷裏之方故自分ニ可致旨被 仰渡事」とある。背割下水を住時は「悪土堀」と称していたのかもしれない。

（3）現況

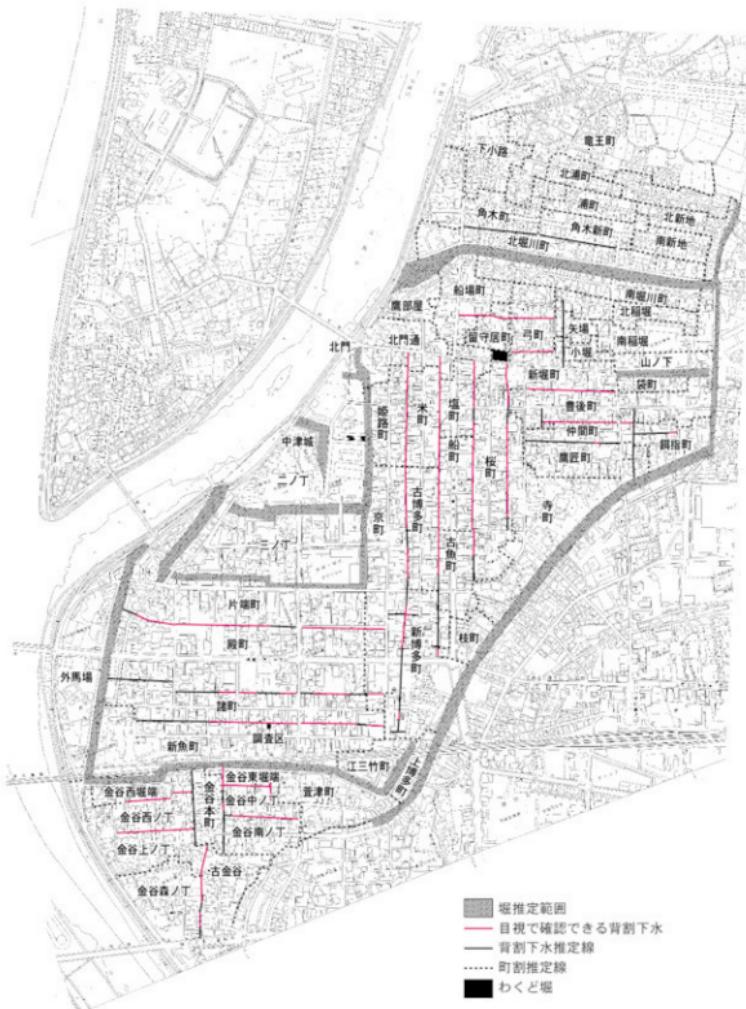
第16図を元に現地を踏査したところ、想定通り分割線上と思われる位置で背割下水を確認した。水路の現状は、開口するもの蓋掛けされるもの、土砂で埋没するもの、近年の建物建設により破壊されているものなど様々であった。また、家屋が林立し把握が困難な箇所もあった。

このように現地踏査は不充分なものとなつたが、目視で確認した背割下水の位置などを現在の地図に落としたものが第17図である。

背割下水が現在でも良好に残る地域は、本丸東側の町屋境（姫路町・米町・塩町・桜町・京町・古博多町・船町・古魚町）と本丸南側の屋敷境（片端町・殿町・金谷）と町屋境（諸町・新魚町）である。一方、本丸北東部は留守居町周辺で確認できたものの、その大半は確認できていない。城下町東端の鷹匠町境は現況でほとんど見ることはできないが、聞き取りにより近年まで存在したことは確実である。また、本丸東側町屋境など道路を横断する所が数箇所あるが、その部分は絵図に



第16図 中津城総曲輪絵図（1983中津藩政史料刊行会より）



第17図 背削下水と堀 (S=1/10,000)

は表れていない。絵図の分割線は屋敷境・町屋境を表現するために引かれたものであることがわかる。現状の水路幅は場所により異なり、金谷地区で30cm、京町周辺で約70cmを測る。開口・蓋掛けするものは現在でも雨水や汚水が流されておりその機能はある程度維持されている。

次に排水方法について触れる。回答文書は下水を先のわくど堀に集め新堀を介して外堀に出したとしている。このように下水を外堀に排水するという方向性は意識されていたよう、片端町・殿町・諸町・新魚町にかけての下水は、西側の外堀に向けて排水した様子であるし、金谷地区は道路側溝に合流して北側の外堀に排水していたものと推測できる。北堀川町周辺は隣接する外堀へ排水したのであろう。姫路町・米町の下水は北側の道路側溝と合流した後、西進し北門付近で川へ排水したと考える。それを裏付けるように2010年度に行った北門付近の中堀の調査において、東の旧町屋側から一定量の水が堀跡の水路へ流入するのを確認している。

城下の設計原理について触れる力量はないが、城下の町割決定時に町割と並行して流水方向を考えた水路配置が行われたことは想像に難くない。町割・堀・水路を一体的に捉えた城下町の建設が進められたのであろう。

(参考文献)

- ・中津市教育委員会「中津城下町遺跡殿町地区発掘調査報告書」2004
- ・中津市教育委員会「中津城跡2」2011
- ・中津藩政史料刊行会「中津藩歴史と風土 第1輯」1981
- ・中津藩政史料刊行会「中津藩歴史と風土 第4輯」1983
- ・山野 寿男「-近世大坂の下水道-背割水路の研究」2007

写 真 図 版



全景（東側、北より）



全景（西側、北より）



SK-4（東から）



SK-6（南から）



SE-1（南から）



SD-1（背割下水、西から）

写真図版2 出土遺物



2



4



5



7



6a



6b



8



9



17



24



27



28



31



32



34



36

写真図版 3 出土遺物



写真図版 4 出土遺物



58



59



60



61



62



63



69



70



72



73



78



79



80



81



83



86

報 告 書 名 抄 錄

ふりがな	なかつじょうかまちいせきしんうおまちちく						
書名	中津城下町遺跡新魚町地区						
副書名	村上記念病院通所リハビリテーション施設増改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
卷次							
シリーズ名	中津市文化財調査報告						
シリーズ番号	第55集						
編集者名	浦井直幸						
編集機関	中津市教育委員会						
所在地	〒871-8501 大分県中津市豊田町14番地3 TEL 0979-22-1111						
発行年月日	2012年3月31日						
所取遺跡名	所在地	市町村コード	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積
中津城下町遺跡	大分県中津市 字新魚町 1888番地5他	44203	203002	33° 35° 55°	131° 11° 7"	20101006 ~ 20101104	75m ² リハビリ 施設建設
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
中津城下町遺跡	集落	近世	土坑・井戸・溝	陶磁器	17世紀後半～18世紀 前半の土坑群		
要約	調査区内において17世紀後半～18世紀前半を中心とする土坑群や井戸を発見した。当時の町屋の状況を理解する上で貴重な史料を得た。						

中津城下町遺跡 新魚町地区

村上記念病院通所リハビリテーション施設増改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

中津市文化財調査報告 第55集

2012年3月31日

発行 中津市教育委員会
印刷 舞川原田印刷社